

## 卒業論文・修士論文・博士論文題目一覧

2012年3月

### 卒業論文

2009年

- 朴 泰俊 郊外ニュータウンにおける緑の量と質に関する研究  
—多摩田園都市と港北ニュータウンの比較と分析—
- 森川 暢彦 愛知県清酒製造業の経営規模による戦略の違い

2010年

- 木村 将大 新潟市における商業立地の変化

2011年

- 伊藤 理士 人口移動の「第3波」が大都市圏外縁部に与えた影響  
—山梨県における人口移動圏と通勤圏の分析から—
- 岩田 裕太 鹿児島県における農業への企業参入  
—その可能性と各社の戦略を中心に—
- 植村有香里 スペイン国外へのフラメンコの伝播と受容  
—日本の事例を中心に—
- 鎌倉 夏来 首都圏近郊地域における大規模工場の機能変化と跡地利用  
—東海道線沿線地域を事例に—
- 久井 情在 市町村合併に伴う広域連携の再編とその課題  
—埼玉県秩父地域を事例として—
- 三田 秀策 地方都市における市街地再開発の合意形成  
—宇都宮市を事例に—
- 守屋 涉 地域一体となったメガ・スポーツイベント受入体制構築の試みとその課題  
—三重県鈴鹿地域でのF1日本グランプリを事例に—
- 山本 啓典 両毛地域におけるフードツーリズムの成立と展開
- 若園真理恵 外国人観光客によるスキーリゾート地域の変容  
—北海道倶知安町とニセコ町の比較を中心に—

## 2012年

- 秋元 裕介 明治期以降の金沢市中心部における商業集積の変容過程  
—尾張町を事例として—
- 内波 聖弥 グローバル競争下における造船業集積地域の集積維持メカニズム  
—愛媛県今治市を事例に—
- 中川 彩 はとバス定期観光コースからみた東京の都市観光の変遷
- 三宅 さき 金沢市における文化振興政策の展開と文化施設集積の課題
- 元橋 航平 地場産業の変容と再編  
—三大うちわ産地の比較分析—
- 山田 彩未 公共サービスの広域化とその課題  
—東京都多摩地区水道事業の統合を事例に—

## 修士論文

### 2009年

- 柴田裕香子 共同牧野保全にみる主体間関係と交流の可能性  
—新潟県佐渡市における大佐渡林間放牧を事例として—
- 船倉翔一朗 山口県下松地域における鉄道車両工業のサプライヤーシステム
- 森嶋 俊行 近代化遺産の保存活用をめぐる主体間関係の地域比較  
—大牟田・荒尾地域と倉敷地域を事例に—

### 2010年

- 植村 円香 高齢化に対応した果樹農家の経営戦略  
—長野県下伊那地域を例に—
- 王 暹 人工林資源の維持と利用の方向性に関する地理学的考察  
—熊本県小国町の事例研究—
- 岡部 遊志 フランスにおける政府間関係と地域の競争力  
—フランシュ・コンテ地域圏を事例として—
- 鈴木 健太 タウンガイドにおける地域情報  
—タウンガイド上に構成された渋谷—

### 2011年

- 秋元 菜摘 分散型コンパクトシティの郊外地域におけるアクセシビリティ  
—富山県婦中地域を事例に—

2012年

- 遠藤 秀一 筑波研究学園都市における産学連携の空間的展開  
—産業技術総合研究所を事例として—
- 佐竹 泰和 周辺地域におけるブロードバンド整備とインターネット利用の変化  
—北海道東川町を事例として—
- 前田 純花 沖縄本島南部における野菜農家群の分化と共存のダイナミズム

## 博士論文

2009年

- 李 賢郁 韓国における女性就業移動とライフコース変容に関する地理学的研究
- 外柵保大介 企業城下町の進化過程に関する経済地理学的研究
- 濱田 博之 日本工業の立地調整に関する数量経済地理学的研究
- 與倉 豊 産業集積・ネットワーク・イノベーションの経済地理学

2010年

- 久木元美琴 保育ニーズの多様化とサービス供給に関する地理学的研究
- 佐藤 正志 地方行財政改革下の公共経営に関する地理学的研究
- 千葉 昭彦 住宅地開発に伴う都市内部構造と商業集積の変化に関する地理学的研究
- 野澤 一博 サイエンス型イノベーションにおける知識フローの空間特性に関する研究

2011年

- 大呂 興平 日本の国土周辺部における肉用牛繁殖部門の動態に関する地理学的研究

2012年

- 大橋めぐみ 中山間地域の資源利用に基づくオルタナティブなフードシステムとツーリズムに関する地理学的研究
- 森嶋 俊行 鉱工業都市における近代化産業遺産の保存と活用に関する経済地理学的研究

## あとがき

東京大学人文地理学研究 第20号をお届けする。今回、本誌は査読付き論文を掲載する学術誌へと移行することとなり、編集体制も一新された。これについては、別欄をご覧いただきたい。また、教養学部後期課程も改組が行われつつあり、広域科学科人文地理分科としては最後となる学生を受け入れたところである。

形式的には新学科が2011年度から発足しているとはいえ、実際の授業が始まるのは2012年度後期からであり、現時点の実質的な研究・教育体制は従前と変わっていない。教養学部前期課程（教養教育）では、人文地理学会部として学部1・2年生を対象に人間生態学・地域生態学・社会環境論等の科目を開講し、大学院では総合文化研究科広域科学専攻広域システム科学系に所属している。前期課程、後期課程および大学院を通じて人文地理学分野の構成スタッフは同一であり、東京大学における人文地理学関係の教育・研究を一元的に担う「人文地理学教室」として活動している。

前号が発行されて以来、教室メンバーにも若干の異動があった。新井祥穂助教が東京農工大学へ転出し、後任として與倉 豊助教が着任した。したがって、教室のティーチングスタッフは、小職、松原宏教授、永田淳嗣准教授、梶田 真准教授および與倉助教の計5名であり、それに教室事務・渋谷桂子

氏と図書管理・川村素生氏を加えて運営に当たっている。その他、ティーチングアシスタント、IT機器管理、図書選定などの業務を院生に分担してもらっている。

さて、上記のように教養学部では後期課程の再編が進行しつつある。人文地理分科も地理・空間コースとして発展的に改組され、新設される学際科学科に所属することとなった。学際科学科は、旧広域科学科のメンバーに旧基礎科学科科学史・科学哲学分科のメンバーを加えて、総合情報学、地球システム・エネルギー、科学技術論等のコースで構成される。その中であって、地理・空間コースは従前の人文地理学のスタッフと建築学関係のスタッフとで新しい教育単位を構成し、より幅広い問題関心とスキルを持った学生を育てようとしている。新しいコースの名称には敢えて人文を冠さず、「地理」の語を充てた理学部に「地理」の名称を持つ学科・専修が存在しなくなった現在、自然・人文の枠を超えた地理学を我々が担おうとする気概を込めたのである。

現スタッフ一同は、こうした動きの中で、これまで教室が培ってきた教育・研究の蓄積を踏まえつつ、時代の流れにも大胆に対応できる体制を整え、駒場に東京大学における地理学研究・教育の拠点を築きたいと考えている。今後とも引き続きご指導・ご鞭撻を賜るようお願い申し上げます次第である。

2012年 早春

荒井 良雄

## お知らせ

『東京大学人文地理学研究』は、この第20号より査読制度を設け、地理学研究に寄与する査読付論文を掲載する学術誌として、新たなスタートを切ることになった。編集体制も強化され、国内外に影響のある質の高い論文の掲載をめざして、努力していきたいと考えている。

永田淳嗣（編集長）

編集委員会 永田淳嗣（編集長） 荒井良雄 與倉 豊 鈴木健太 古川智史